



観音大祭「柴燈護摩」

平成13年3月
第34号

発集発行

町中府郡芸安島
2丁目2-8-4
宗正観
真行
小出真行

悪いことをしなければ苦しむこと無く

善いことをすれば楽を得るのである

(秘蔵宝鑰)

「お彼岸」

春のお彼岸が近くなりました。ところでお彼岸というと、どこか遠いところにある別世界のように考えられています。

極楽、お浄土、仏の国ともいいますが、いずれも「彼岸」に違いないのです。でも、

極楽は、東にもなく西になし

来た(北)道探せ 皆身(南)にあり

という道歌がありますように地獄も極楽も、自分自身が種を蒔き、そしてまた、刈り取るものなのでしょうね。

この世

人は死んだらどうなるのか、古今を問わず重要な問題です。実は私も真剣に考える年代になりました。

家族と死別したときほど戸惑うことはありません。悲しさ・寂しさを通り越してしまします。いつでもそばにいる安心感、いつまでもそばにいてほしいという希望が死別によって根こそぎにされ、ぽっかりあいた心の空洞はなかなか埋めきれぬものではありません。でも戸惑う中にも故人の行き先がわかれば一安心し、また別の世界で次の生命を持つてほしいと願い、再び会えるものなら、その努力を惜しむ人はいないでしょう。

お釈迦さまは、修業の末に悟りを開き、誰もが感じている死の恐れや不安、また人間関係から生じる葛藤の原因を突き止め、それを煩惱として退けたのです。家族・親族・友人などに対する情愛・執着する思いを煩惱とし、その思いを離れる筋道を明らかにしたのです。救いを求める人々に要求されることは、

信じること〔信〕、きちんと考えること

〔智慧〕、あきらめないで励むこと〔努力

〕「精進」です。言いかえれば、

「死後の世界がどうなっているのか、わかっていることを空想して迷い悩むよりも、今の自分の生き方を死後に継続させていけ」という現実的な考え方です。苦難を離れ安隱に生きていく筋道を示すことを現世利益といいます。真言宗もこのように現世を重視した考え方のうえに成り立っています。

真言宗の目指す「即身成仏」という大きなテーマは時間的にも場所的にも制約されない境地として開かれ、生きている人、死んだ人あるいは悟った人、迷っている人という分け隔てを考えていません。ですから死んだらどうなるかと考えるより、今どう生きるかということが問題なのです。人がこの世に生まれ死んで行くありさまを

阿字の子が 阿字の故郷立ちいでて

また立ち帰る 阿字の故郷

阿(ア)はアイウエオのアと考えて下さい。アが五十音の最初であるように、大日如来は万物の源であり母にあたります。大日如来を阿字と表し、衆生を阿字の子といい、

阿字の故郷とは大日如来の世界、すなわち生き死にを含み超えた境地です。

つまり私たち大日如来の子は、母である大日如来の故郷から、この世に生まれ、この世の寿命が尽きると、再び生まれ故郷へ帰っていくという意味です。

これが私たちの命の土俵と推移なのです。生きている人も死んで行く人も分け隔てはないのです。死んだらどうなるかと考えることも確かに大事でしょうが、お互いを大日如来の子として尊敬し、力になり、支えあつていく現時点の生活姿勢が大切と思えてなりません。

①インド宗教の魅力

小 出 英 生

インドの宗教が人々を惹きつける魅力は、何といっても、「悠久のインド」、文化の多様性に根ざしている。インドでは、実に多

様な生活習慣とともに、高度に洗練された教義あるいは宗教思想が、まさに雑然としたあり方で、矛盾なく併存してきた。インドの宗教はまさに無数の顔をもっているからこそ、現代人が見失いかけた大切なものを、誰もが見つめなおすことができるように思える。そこで私は、インド宗教の流れ、インドの根本思想と変化、ヒンドゥー教に分けてひもといてみることにする。

① インド宗教の流れ

インドには、三千余年の宗教の歴史があるが、その代表的な宗教といえばヒンドゥー教や仏教、ジャイナ教それにイスラームなどである。現代のインド社会においては、ヒンドゥー教徒はおよそ八三パーセントを占めているようだ。こうしたインド宗教の概要を、インド宗教史の流れにそって、簡潔に説明してみることにする。

西紀前一五〇〇年ころ、アリア人が西北インドのパンシャブ地方に侵入したが、かれらがもたらした聖典は「ヴェダ」とよばれ、アリア人の宗教は、その文化の主な担い手であるがバラモン階級にちなんで

バラモン教とよばれる。バラモン教は、本来、多神教の世界であり、神々は自然現象の擬人化されたものであった。

② インドの根本思想と変化

西紀前五〇〇年ころを中心に成立するウパニシャッド（ヴェダ聖典の終結部）の時代になると、宇宙の根本原理ブラフマン（梵）と個人の本質アトマン（我）が同一である、とする梵我一如の思想が説かれるようになった。この思想は、一切万物が一定の順序によって発生し、人間をはじめ一切の生物の靈魂はおのおの業に従って種々の形をとって輪廻する。この輪廻からの解脱が人生の最高目的で、そのために梵我一如の根本原理を悟ることによって、業の力を消滅させて、再生を免れるのにあると解くものである。インドの宗教全体を特徴づけている。「業」と「輪廻」の思想あるいは「解脱」の思想も、ウパニシャッドにおいて、はじめてあらわれるようになり、それらの思想は、インドの人々の人生観に強い影響を及ぼしてきた。

同じ西紀前五世紀ころ、反バラモン教的

な自由思想家が排出する。それらの宗教家のなかで、もつとも重要なのが、仏教の開祖であるゴータマ・ブッダとジャイナ教の開祖であるマハーヴィラである。マハーヴィラは、業の束縛から解脱するために、禁欲的苦行を強調した。ブッダは、この世界に存在するすべての事物現象は「縁によって生起している」という「縁起」説を説いた。

この仏教の教えはアショーカ王の帰依によって、インド全土に広まった。前一世紀ころからは、大乘仏教運動がおこり、膨大な大乘経典が編纂され、大乘仏教思想が展開されたその後、大乘仏教が学問仏教になっていくにつれ、七世紀には密教が盛んになったが、ヒンドゥー教の勢力が伸びるにともない、この独自性を失い、ついに十三世紀はじめイスラームの進入によって、インド社会から消滅したとされる。

おかげさま

人間誰しも「幸せ」を願わない者はいません。ただ、その「幸せ」が自分だけのものでよいのかどうか？そこが問題なのです。人間が、他者や自然環境とまったく無関係に生きていけるものなら、自分だけの幸せを追求するのもよいでしょう。しかし、決して一人では生きていけない存在なのです。

さてよく耳にする「おかげさま」という言葉がありますが、これは「かげ」を敬うことからきた表現で「かげ」とは、文字通り光の当たらない部分や、何かに遮られて見えない部分のことです。ふだん私たちは見えている部分だけにしかあまり気にかけません。しかし、見えない一部分に支えられている面もたくさんあるのです。つまり「おかげさま」というときの「かげ」とは、私自身を支えてくれています。「恩恵」のことなのです。

しかしながら、それはなかなか見えにくいものであり、知らずのうちに、その「かげ」の人々や物事を傷つけたり踏み台にし

ていることも往々にしてよくあるのです。

「生きる」ということは、あらゆる有形無形の諸条件、諸要因によって「生かされている」ことなのです。同時に自分の存在もきつと、他の命へ影響を及ぼしていることでしよう。そこに自分のことだけでなく他者や自然環境をも視野に入れて、恵まれたわが命を精いっぱい生かしていく責務を痛感するのです。

ですから、「自分さえよければ」と自分の幸せと安心が得られればよしとする人生は、他者をかえりみない無慈悲な生き方と言えます。そうした姿勢は周囲に迷惑をかけるばかりでなく、自分自身が破滅へと赴く道であることを自戒しなければなりません。

仏教には「冥加」という教えがあります。「冥」は「暗い」とか「目に見えぬ」という意味です。つまり世の中は、さまざまな目に見えない力が加わり、その力に支えられて、成り立っているという教訓です。

私たちは、目に見えない空気をはじめと

して、水、太陽、土、野菜、魚、肉等の食物などによって支えられ、生かされています。そうした数多くの恩恵を日頃忙しさについ忘れがちになりますが、ゆとりをもって味わいたいものです。

墓地有

一㎡ 八十万円より
※他宗派の方も可

平成十三年度 年間行事予定

- | | | |
|-----|---------|------------|
| 三月 | 十一日(日) | 観音大祭 |
| 三月 | 二十日(火) | 彼岸中日 |
| 四月 | 十七日(火) | 小豆島八十八ヶ所巡拝 |
| 七月 | 二日(月) | 石鎚山参拝 |
| | 三日(火) | |
| 八月 | 十五日(水) | 施餓鬼供養 |
| 八月 | 十九日(日) | 地藏祭 |
| 九月 | 二十三日(日) | 彼岸中日 |
| 十二月 | 三十一日(月) | 年越し祭 |